

「同窓会のかたち」

東京金剛会会長

前田佳彦

(1984年度卒・20期)

同窓会の形が急速に変わってきている。首都圏外の名門校と呼ばれる高等学校の同窓会首都圏支部のHPを検索すると、参加者が減ったことで毎年開いていた総会が隔年開催へ変更されていたり、HPの更新自体が疎かになっている組織も増えてきた。SNSが普及し同窓会に足を運ばずとも、旧友に再会できる機会は広がった。事前にメッセージを交換し選別すれば、会ってみただけで退屈だったり嫌な思いをするリスクもない。時間を費やしお金をかけて同窓会に参加する意義はあるのかと、私自身も同級生から訊ねられたこともある。

たしかにそう思う。総会・懇親会では様々な世代の卒業生が集う。共通項は清風南海高校を卒業したことだけ。在学した時代もその後進んだ道も全く異なる。年が離れると何を話せば良いか戸惑う事もある。そのような下手すれば心地悪さすら感じる会に、毎年参加されるある先輩がいらっしゃる。その方は多分に漏れず母校には辛い思い出しかなく、参加する同級生も僅かしかない。そして私と共有できることは母校以外に何もない。

今年もお会い出来ましたね、お元気ですかとご挨拶をすると、「元気やったか。会長って大変やな。懇親会でも緊張してるで。」と気さくに応えて下さる。先輩曰く、「年に一度しか会わない面々と話をすると、皆がどんな変化(成長)をしたか、また自分自身が気づかぬ間に変化(老化)したかがよく分かる。定点観測みたいなものだね、でも皆賢いから知らない人でも話をするととても楽しい」と仰る。同窓会は旧知を温める場であることは間違いない。しかしそれに留まらず新しい出会いを通じた、非日常的な刺激を受ける場でもあることに気付かされた。

会長を拝名した際に、当会の使命は、「我々の卒業した学校が素晴らしい学校であったことを、改めて認識する機会の提供」であると考えた。家に帰ればまた普段の生活に戻る。参加者の方には、今日は楽しかった、明日からも頑張ろう、と感じて貰えるような東京金剛会にしたいと考える。

最後に今年も多くの方にご参加頂き、懇親会や二次会では心に沁みのお話を多く伺うことができました。本当にありがとうございました。また来年もお越し下さい。